

## シンポジウム「フィクション化する世界」 要旨

「フィクション」とは書店や図書館でもよく見かける、ありふれた単語である。しかし、いざこれを日本語に翻訳するとなると、「虚構」や「嘘」ではこぼれ落ちてしまう要素が多いのではないだろうか。例えば「フィクション作品」を読むとき、私たちが没頭しているその行為、その時間は紛れもない現実味を持っているはずだ。

そこで本シンポジウムでは、「フィクションと現実世界は切り離すことができない」という基本命題を共有して議論をおこないたい。また、フランス文学や思想に限らず、日本文学やドイツ文学の研究者を招いて文学・文化研究一般を見据えたシンポジウムを目指す。

以下に示すように、文学や哲学作品の具体的な分析を通じて、フィクションがどのように機能しているか、フィクションと現実の関係はどうなっているか、あるいは、いかにして現実がフィクションとなるのか、といった問題について考察する。

まず宮腰は、地獄極楽遍歴譚『孝子善之丞感得伝』をとりあげ、フィクション的世界をえがく説話文学の方法を、絵画資料を交えながら明らかにする。続いて柿並は、ラクー＝ラバルト&ナンシーをとりあげ、「書く主体」と「ミメシス（模倣）」の関係について考察する。摂津は、ドイツの演出家集団「リミニ・プロトコル」の上演法を例に、「演戯」「フィクション」「リアリティ」「日常」について検討する。最後に合田は、ジャリの「パタフィジック」をとりあげ、そのフィクション論としての側面を浮き彫りにする。ターブルロンド（ディスカッション）では、以上を踏まえて、登壇者が議論を交わすだけでなく、会場の聴衆を交えた活発な意見交換をおこないたい。